

一

次の文章を読んで後の問に答えなさい。

※ カントによると、各人が、自己の「道徳」のルール（よし悪しのルール）を、自分の理性の力で内的に打ち立てる点に、近代人の「道徳」の本質がある。たしかにその通りですが、私はこれにつけくわえて、そのためには、人は、青年期のうちに、それまで形成されてきた「自己ルール」の形をはっきり了解しなおす必要がある、と言いたいと思います。

では、どうしたら自分の「自己ルール」を了解しなおすことができるか。いくつかポイントがあります。まず重要なのは、言葉が②「たまる」ことです。

われわれは教育で、少しずつごく日常で使う言葉以外のいろんな言葉を覚えていくのだけど、自分を理解するのに必要な言葉がたまってくるのは、ふつうは高校から大学にかけてです。象徴的に言えば、それは「③批評する言葉」としてたまってくる。

中学、高校くらいになると、誰でも、まず親に対して批判的になって、批判の言葉を持ちます。お母さんはいつも口うるさいけど、自分はきまぐれだとか、お父さんはいつも威張っているけど、ほんととは気が小さい、とか考えるようになる。

子供は、自分はまだ親に①ヤシナワれていて一人前ではないのだけど、周りのいろんなことを批判する言葉を持ち始める。これがいわば人間の心の「自由」の開始点です。哲学ではこれを「自己意識の自由」と言います。「自己意識」の内側では自分のまわりのどんなことも批判できる。でも、まだ言葉が十分に成熟しないあいだは、子供の「批判」は、単なる不平不満、1これこれは「氣にくわない」、です。

中学生や高校生どうしでは、趣味があうことが大事で、趣味があうと友だちになれる。「私、[※]椎名林檎、好き」「うそ、私も大好き！ やったー！」「あの映画見た？ めっちゃよかったよね？」「うんすごーく、よかったー！」「でも、私、あれは嫌い、ダサーい！」「そう、私も。超ダサーい！」。これが中学、高校生の趣味的「批判」ごっこです。好き嫌いがあただけの批判です。しかし、大学生くらいになると、「批判」はすこしずつ「批評」になってゆく。「私、あの音楽大好き、なぜって、ここのフレーズとこの歌詞がぴったりあってるんだ」「あー、わかる、けど、ちよつとイントロはゆるくない？」

「批評」は、単なる「好き嫌いの批判」ではなく、好きときらいの「理由」が入っています。好き嫌いの理由がちゃんと見えるようになると、趣味は「批評」に近づく。で友だちづきあひも、単に好きな者どうしではなく、趣味の違いがキヨウウできるつきあいになる。1趣味自体よりも、美意識をちゃんともっているかどうかが問題になります。ともあれ、このことがとても大事だが、「批評」ができるには「言葉」がたまらないといけない。

友だちどうしで「批評」がしあえる、というのは、じつは、互いに「自己ルール」を交換しあっているということです。「自己ルール」とは、その人がいつの間にか身につけている「よいー悪い」のルール、また「美醜」のルールです。「美醜のルール」は簡単に言うと、各人が身につけた美的センス、美意識です。自己ロマンの強い人は、美醜のルールが強く形成される傾向がある。

ともあれ、高校くらいまでに、人間は、自分の「よいーわるい」と「美醜」のルールを形成していく。で、「自己意識」が強くな

るにしたがつて、それでいろんなものを「批評」（趣味判断）するようになる。でも、大事なのは、いろんなものを「批評」しあうことで、友だちと自分の「自己ルール」を交換しあい、確かめあい、そしてそのことでそれを調整しあっていくということです。これはちょうど、「哲学のテーブル」で、いろんな人が自分のよいアイディア（原理⇨キーワード）を出しあってあれこれ言いあい、そのことでその「原理⇨キーワード」をだんだん鍛えてゆくのと同じ原理なのです。

じつは、友だちのこういった「批評」しあう関係によつてしか、人は、自分の「自己ルール」を理解することはできません。よく、「他人こそは自分をうつす」**2**だと言います。人間は他人を通してしか自分を理解することはできない、と。その通りですが、その意味を、哲学的に言うとかこんな具合になります。われわれは誰でも、自分だけの善悪・美醜の「自己ルール」を、いわば感受性の④メガネとしてかけている。そしてそれは長い時間をかけて形成されたもので、誰もこのメガネを外すことはできない。もし青いメガネをかけていたら、すべてが青っぽく見える。メガネのレンズが少しゆがんでいたら、すべてが歪んでみえる。でも、われわれがこのメガネを外せないなら、それがわれわれにとつては「正常な」世界です。

1 ふつうは、自分のメガネが歪んでいるのか、色がついているのか、誰にも決して分からない。このことに気がつくのは、他人がみているものと、自分が見ているものとの違い、偏りに気づくときだけです。これを「視線の※偏差」とか「視差」と言います。

もしわれわれが、自分の好き嫌い、**1**趣味判断だけで生きていけば、「自己ルール」の形がどうなっているのか、理解する

ことはできない。「批評」しあうことではじめて、人は自分の「良し悪し・美醜」のルールが他人と違うことに気づき、また⑤それを交換することができるのです。

もちろん、他の人もみな自分の「自己ルール」を自分のメガネとしてかけている。だから、例えば相手の感受性や美意識が「正しい」とはかぎらない。厳密に言うとか、すべての人が自分なりの「メガネ」をかけているので、絶対に正しい「メガネ」というものはないのです。

しかし、われわれは相互の批評を通して、さまざまな人の「自己ルール」と自分の「自己ルール」との偏差を少しずつ理解し、そのことではじめて自分の「自己ルール」の大きな傾向性や問題性を了解することができるわけです。

（竹田青嗣『中学生からの哲学「超」入門』）

（注）

※カント⇨イマヌエル・カント（1724～1804）。ドイツの哲学者。

※椎名林檎⇨日本のシンガーソングライター。

※偏差⇨標準となる数値、位置、方向等からのかたより。またその度合い。

問一 傍線部①「『自己ルール』を了解しなす」とはどういうことですか。次の空欄に当てはまる言葉を書いて、説明しなさい。

言葉がたまつた者が、（ ）ア （ ）ことによつて、（ ）イ （ ）しなすこと。

問二 傍線部②「『たまる』」と同じ意味で用いられている語句を本文中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問三 傍線部③「批評する言葉」について、次の会話文の中から「批評」に当てはまるものを全て選び、記号で答えなさい。

ア 「テストまであと二ヶ月もあるのに、あせつてばかりで気が落ち着かないな。」

イ 「『ドラえもん』ってつい見てしまっね。話の展開が分かりやすいけど、飽きないんだ。」

ウ 「古典なんて読んでも役に立たないよね。」

エ 「ゲームをしていると、『やめろ』と言われて腹が立つ。」

オ 「『今昔物語集』は現代の常識からすると、矛盾もあるけど、おもしろいよ。」

問四 本文中に四つある**1**に共通して入る最も適当な語を次から選び、記号で答えなさい。

ア しかし
イ つまり
ウ だから
エ すると
オ あるいは

問五 **2**に当てはまる最も適当な漢字一字を答えなさい。

問六 傍線部④「メガネ」は本文中で何の比喩として用いられていますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の思いがちに気づかせてくれる社会のルール

イ 角度によつては他人から見える物事の本質

ウ もともと持っているその人だけのこだわり

エ 自分でしか見ることができない自己本位の基準

オ 物事をより正確に見るために不可欠な道具

問七 傍線部⑤「それ」は何を指しますか。本文中から二十字以内で抜き出しなさい。

問八 本文の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人間の成長を例にとつて、言葉の獲得が自分の仲間を増やす手段として有効であることを訴えようとしている。

イ 一般的な考えとは異なる視点から、言葉の使い方ひとつで人間関係が大きく変わることの危うさを警告している。

ウ 一般論を補足しつつ、言葉の増加や他人とのズレを認識することが自分を理解するために重要であることを示している。

エ 比喩表現を多用することで、言葉を自在に使いこなせる筆者の能力の高さをアピールしている。

オ 哲学の古典的原則を紹介し、批評ということが人格形成にいかん重要であることを述べている。

問九 傍線部①「ヤシナワ」、②「キヨヨウ」のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、送りがなが必要な場合は送りがなをひらがなで書きなさい。

二 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

「俺のは六段切り替えでスーパーカーライトだぜ」

自転車店に新車を注文した翌日、昇平は学校に向かう道の途中で草太に教えてくれた。――既にクラスは別々になっていたが、二人で一緒に登校する習慣は相変わらずだったのだ。

楽しみで待ちきれなかったのか、昇平は自転車店でもらったカタログをランドセルに入れて持ってきていた。他の友達よりいい自転車を買ってもらえるのが嬉しいようで、カタログを指さしながらその自転車の機能についてあれこれ喋っている。

草太にも①その気持ちは分からなくもなかった。これまで昇平が乗ってきた自転車は、従兄のお下がりだったり前輪だけ草太のお古だったり、あまり見栄えがしないものばかりだったのだ。ようやく新品を買ってもらえるとなれば、喜びもひとしおなのだろう。

他の友達の変速機能は五段切り替えが主流だったし、電池の力で開閉するリトラクタブルライトもまだ珍しかった。いわば昇平の新車は、みんなが憧れるような要素を全て備えたマシンだったのだ。

他の者だったら、昇平の新しい自転車をさぞ羨ましく思ったことだろう。しかし草太の中にはそんな気持ちは全く湧いてこなかった。草太にとっては、多くの仕掛けがついたものより自分の注文した自転車の方がずっと格好いいものだったのである。

草太が言うと、昇平の横顔にちよつと複雑な表情が浮かんだ。

スピードが出ると聞いて羨ましくなったのかもしれないし、カタログに載っているその自転車の値段を見て引け目を感じたのかもしれない。

「スーパーカーライトはついてないけどね」

昇平が黙ってしまったので、④草太は慌てて付け加えた。そして話題を変えようと、新しい自転車が届いたらどこに行こうかと尋ねてみたのだった。

「やっぱり、浅川の土手でぶつ飛ばすのが一番かな」

昇平もすぐに笑顔に戻った。草太もそれではっきりとして、前から考えていたことを口にしたのである。

「新しい自転車で、海まで走ってみようぜ」

風ヶ丘だけでなく浅川や特訓山も遊び場に使っていた二人には、既に校区外に出ることくらい何でもなくなっていた。

四年生になって自由に校区外まで遊びに行けるようになったとはいっても、それくらいではちつとも面白くない。⑤走れるだけ走り、自転車では行ったこともないくらい遠くまで行ってみるというのが草太の思いついた計画なのだった。

草太の家の前を走る県道を、東に向かってひたすら走っていくと海に出る。外房に開けた砂浜には幾つもの海水浴場があつて、草太も物心ついた頃から何度も連れていってもらっていた。車に乗せられて往復しているうちに道順もしつかり覚えてしまったほどだ。

なにしろ県道沿いに走っていくだけでいいのだ。途中で国道や線路にぶつかるが、そのすぐ先が海である。砂浜の近くには海沿いの道も通っているし、新しい自転車で海岸線を走ったら気分は

「ソータのはどんなやつなんだ？」

一通り自分の自転車について喋った後、昇平は思いついたように尋ねてきた。

草太はカタログのページをめくった。メーカーが違うので全く同じものは載っていないかったが、よく似た車種のページはすぐに見つかった。

「俺のは、サイクリング車」

なるべくあつさりと言ったつもりが、ちよつと自慢げな声になってしまった。カタログ写真の、速そうなドロップハンドルの自転車を指してみせる。

②「……なんか、大人の乗るやつみたいだな」

昇平が意外そうに言った。きつと考えてもいなかった車種なのだろう。

「浅川の土手とかで見かけるやつだよな、これ？」

③草太は強く頷いた。まさにそのサイクリングロードで、草太はこういう自転車に憧れるようになったのだ。

一緒に特訓山へと冒険して以来、二人は度々校則を破っては校区外に遊びに行っていた。大人に見つかって怒られたことも何度あったが、川原や特訓山などの遊び場の誘惑には勝てなかったのだ。

やがて、草太は土手の道をとんでもない速さで疾走していく自転車に心惹かれるようになっていった。乗っているのは大人や学生風の若者ばかりだったが、子供用のものもあると知って俄然欲しくなったのである。

「スピード出していっばい走るには、こういうのが一番なんだってさ」

最高だろうと思った。

「朝から出発すれば行つて来れると思うんだ。おにぎりとか持つてけば、海で食べられるしさ」

そんな提案に、昇平が乗ってこないわけではない。新たな冒険の予感に目を輝かせて身を乗り出した。

「よし、じゃ、いつ行く？」

実行する日は四月最後の日曜日と決まった。その頃までには新しい自転車も届いているだろうし、二人も充分に乗り慣れているはずだ。

どのくらい時間がかかるかは分からないけど、朝から出かければ日が暮れるまでに帰つてこれるだろう。今度は親に隠れて行く必要もないので、それぞれ母親に頼んで弁当を作ってもらおうということになった。

計画がまとまると、昇平はまじまじと草太の顔を眺めてきた。戸惑う草太の目を覗き込み、笑顔で声を上げる。

「ソータって、すげえな」

「えっ？」

「いつもはあんまり喋らないけど、実はすげえこと考えてたんだな」

照れくさくなるくらいの、手放しの賛辞だった。友達からそんな風に讃えられたのは、草太にとって初めての経験だった。

「――前から、思ってたんだ」

草太は⑥照れ隠しに呟いた。何か言わずにはいられなくて、ほとんど無意識に口走っていた。

「自転車で、どこまで行けるか試してみたいって」

「どこまでって……」

「初めて行った時は、浅川も特訓山もすぐ遠くって感じだったろ？」

「恐かったよな、道に迷ったりして」

昇平は同意を求めるように笑いかけてきた。——あの時の冒険は、今まで二人だけの秘密にしていた。

見知らぬ団地の中を泣きそうな気分で行き回った記憶は、今も草太の中に鮮やかに残っている。校則を破った時の胸の高鳴りや帰り道を見つけた時の嬉しさを、昨日のことみたいに覚えていた。

ただどそれ、もう三年前のことだった。特訓山の本当の名前が向陽台だということも、あの時の団地が谷沢団地だということも、二人は既に知っている。

「ショーちゃん、今は特訓山を遠いと思わないだろう？」

「当たり前だろ。あそこが遠いと思ったのなんて、一年の時だけだつて」

「でもさ、もしも今でも特訓山に行ったことなかったら、やつぱり遠いって思う気がするんだ」

「……まあ、そうかもしれないけど」

「だからさ、もつとずつと遠くに行ってみたら、そこも遠いとは思わなくなると思うんだ」

「海でもか？」

「海だつてどこだつて、自転車で行けるようになれば、きっと自分の縄張りみたいなになると思うんだ。どんどん遠くに行けば、どんどん縄張りが広がってさ」

「縄張りかー！」

いつもより饒舌な草太に、昇平はすっかり感心しているようだった。その反応に気をよくし、草太はさらに話を続けた。

「ショーちゃんだつて、縄張りはい方がいいたろ？」

「そりやそうだな」

「だからさ、思うんだ」

熱にうかされたような気分で、草太はさっきの言葉をもう一度繰り返した。

「自転車で、どこまで行けるか試してみたいって」

(竹内真『自転車少年記』)

(注)

※外房＝千葉県南部、房総半島の太平洋に面する地域。

※饒舌＝口数が多い。

問一 傍線部①「その気持ち」とありますが、その気持ちが書かれている部分を本文中から二十五字で抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

問二 空欄に当てはまる語として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア いわゆる

イ あたかも

ウ さすがに

エ いかにも

オ はたして

問三 傍線部②「……なんか、大人の乗るやつみたいだな」とありますが、草太の自転車と比べて、昇平の自転車はどんなものかと言えますか。本文中からそれが分かる一文を抜き出し、初めの五字を答えなさい。

問四 傍線部③「草太は強く領いた」とありますが、草太はどのような気持ちで強く領いたのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分がサイクリング車を理想とし、それを注文したことが良い選択だと強く肯定したい気持ち。

イ サイクリング車は大人が乗るものだと思いこんでいる昇平に、そうではないと伝えたいという気持ち。

ウ どんな手段を用いても、自分の思い描いたとおりの自転車を手に入れるんだという強い気持ち。

エ 自分が注文したサイクリング車はあまり街を走っておりず、特別なものであることを自慢したい気持ち。

オ サイクリング車を注文したことで、周りの同級生より大人ぶることができたことを喜ぶ気持ち。

問五 傍線部④「草太は慌てて付け加えた」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア スピードの出ない自転車に落胆している昇平に、スピードよりも見た目が大切だと知ってほしかったから。

イ 性能が劣る自転車しか買ってもらえない昇平に自慢してしま、いやな思いをさせたと思ったから。

ウ 話題を変えるために、ウソだとしても草太の自転車にはスパーカーライトが付いていないと言いたかったから。

エ 昇平を怒らせると面倒なことになるので、自分の自転車の欠点を示しておきたかったから。

オ 新しい自転車を買ってもらえることで高ぶっている昇平の気持ちに、水を差してしまったと思ったから。

問六 傍線部⑤「走れるだけ走り、自転車では行ったこともないくらい遠くまで行ってみるといのが草太の思いついた計画なのだ」とありますが、草太はなぜこのような計画を思いついたのですか。本文中の語句を用いて六十字以内で書きなさい。

問七 傍線部⑥「照れ隠しに」とありますが、草太は何に照れたのですか。本文中の語句を用いて十字程度で答えなさい。

問八 傍線部⑦「草太はさっきの言葉をもう一度繰り返した」とありますが、なぜもう一度繰り返したのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の真剣な気持ちが昇平に伝わっていると思えず、熱意をこめることで昇平を説得するため。

イ すぐにでも海まで走って行きたいというあせりを、何度も言葉を繰り返すことで抑えるため。

ウ 最初の言葉には「どこまで行けるか」、繰り返す言葉には「人生における試練」という意味をこめるため。

エ 自分の計画に昇平が同意してくれたことでさらに強まった自分の気持ちをも、より明確にするため。

オ 昇平が同意してくれたとはいえ不安も残るので、計画が実行できるかどうかを昇平に確認するため。

問九 昇平と草太の人間関係として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 互いにライバル視している。共通の話題で盛り上がることが多いが、勝負になると相手を打ち負かそうとする関係。
イ 幼なじみで仲が良い。互いに遠慮することはないが、時には本音を言えず、腹の探り合いをする関係。
ウ 信頼しあっている。互いを気づかい、いたわることができ、二人で秘密を分かちあう関係。

エ 二人だけで孤立している。他の友達には心を開かず、二人でいる時だけが心の拠り所となっている関係。

オ 対等ではない。草太には昇平しか友達がいないくて、いつも昇平の顔をうかがっている関係。

